

大腸癌の早期発見

深川医院 深川博淳先生

近年、大腸癌による死亡率は、全ての悪性腫瘍の中では4番目、女性では2番目を占めるようになってきました。下血、腹部のしこり、体重減少などの臨床症状が出現している大腸癌のほとんどは5年生存率が低いのに対して、早期に発見されれば、5年生存率は80%以上になるとされています。やはり、早期発見は、症状の出現前に検査を受けることが重要です。

そして、大腸精密検査法としては、全大腸内視鏡検査と、注腸X線検査があります。5ミリ以下の大腸癌も発見されるようになり、大腸癌の自然史も明らかにされてきており、診断学はさらに進歩しています。大腸癌検診では、症状のない方が、直接、精密検査を受ける方法もあり、便潜血検査で陽性の方が、精密検査を受ける方法もあります。

例えば、ある地域で行った、便潜血検査による大腸癌集団検診の成績は、延べ7年間の受診者数、約18万人中、3.8%、便潜血陽性率で、精密検査受診率92.1%でした。その中で大腸癌484例が発見され、うち早期癌が312名と半数以上を占めていました。早期発見には、集団検診や、人間ドックなどでの便潜血陽性者が、精密検査を受ける方法も、高い有効性を示しています。そして、陰性者は毎年検診を続けることで、早期発見率が高くなります。

最後に、進行癌は、男性では60歳代、女性では50歳代が多いとされていますので、男女共に、その年代前からの積極的な精密検査、便潜血検査の受診をお勧めします。